

清姫は、男に近付いた。……そして、声をかけた。

「葉湯です……。身体が暖まりますよ……。」

「ありがたい……。しかし、わしは……。このとおり、癩だ……。そなたのような若い娘は、近付かない方がいい……。」「男がいった……。」

「貴方様は、御山からのお帰りなのですか……?」

清姫は、目敏く……。その男の汚れて少し黒くなっている巡礼服に、熊野坐神の印が押しあてられているのを見つけている……。

「御山で……。背の高い……。若い僧を見なかつたでしょうか?」

「背の高い……。若い僧……。?」

清姫は、安珍の特徴を言った……。

癩の男の崩れた顔が、みるみる輝き出した……。

「おーおー、その僧なら、間違いなく……。わしを助けてくれた男じゃ……。!」

男は、安珍の活躍を語った……。

「わしは、その後の事が気になって、うわさ話に耳をすませておつたが……。なんでも、次期、別当候補の増皇様から、ずいぶん、褒められた……。と聞いたぞ。」

清姫は、嬉しくなった……。おもわず、癩の男に抱きついている……。

「ばかもの! わしに近付くなというに……。」

そう言う男の顔が照れて真っ赤になっている……。

「しかし……。嬉しいのう……。こうやって……。熊野に巡礼に来て……。化け物のようになつてしまった……。このワシを……。人間扱いしてくれるものが、こうして、少なくとも、二人おつた……。」

正直……。御山にお参りが、出来ても、このわしの病が治る……。とは、思えん……。しかし、わしは、この熊野の巡礼をして、本当に救われた。」

そう言いながら、男は、涙を浮かべている……。

清姫は、安珍の活躍を、それが……。自分の事であるかのように嬉しくなつて……。その日、一日、家の者を……。誰でも、彼でも……。おかまいなく捕まえては、聞かせて伝えた……。

まるで、久しぶりに……。屋敷の中に、明るい姫が戻つて来たようだった……。

清重は、繰り返し聞かされる話に辟易しながらも、嬉しそうだった……。

もうすぐ……。安珍は、帰つて来る……。清姫は、はしゃいだ……。